

「東京歯科大学千葉病院医療連携講演会」開催のご案内

謹啓

初夏の候、時下ますますご清祥の段お慶び申し上げます。平素は当院との医療連携に多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本年も「東京歯科大学千葉病院医療連携講演会」を開催することとなりました。昨年同様、テーマは千葉県歯科医師会及び近隣歯科医師会代表の先生方からのご意見を頂戴し、決定しております。

先生方におかれましては、ご多忙中のこととは存じますが、お知り合いの先生もお誘い合わせの上、ご出席賜りますようお願い申し上げます。

謹白

平成29年5月吉日

東京歯科大学千葉病院

病院長 一戸達也

医療連携委員長 柴原孝彦

記

日時・場所：平成29年7月6日（木） 受付 14：30～15：00

講演会 15：00～18：30

【会場】東京歯科大学 実習講義棟3階 歯科臨床研修医室

※ 演者・スタッフの服装につきましては、クールビズとさせていただきます。

協力：千葉県歯科医師会 千葉市歯科医師会 習志野市歯科医師会 印旛郡市歯科医師会
市原市歯科医師会 八千代市歯科医師会 船橋歯科医師会 江戸川区歯科医師会

会費：無料 ※ 軽食のご用意がございます。

症例相談：症例相談コーナーを設けています。症例相談をご希望の先生は、別紙 参加申し込み用紙 下覽に相談内容をご記入の上、FAXにてお申し込み下さい。ご相談の対応は、当院医療連携委員が担当いたします。当日は資料（口腔内写真、X線写真、口腔模型等）をご持参下さい。なお、相談希望が多数の場合は、十分な対応ができないこともございますので、予めご了承下さいますようお願い申し上げます。

申込方法：誠にお手数ではございますが、準備の都合上、別紙 参加申し込み用紙 にご芳名等をご記入の上、7月3日（月）までにFAXにてお申し込みの程お願い申し上げます。
※準備の都合上事前のお申し込みをお願いしておりますが、当日のご参加も受付けております。

〈問い合わせ先〉東京歯科大学千葉病院 医療連携室

TEL 043-270-3279/FAX 043-279-2046

本講演会は公益社団法人日本歯科医師会生涯研修事業の単位認定となります。

講演内容

1. 目指そう!! “Common disease” 認知症患者への対応力向上 15:10~16:10

演者：専門歯科系(摂食嚥下リハビリテーション科) 准教授 杉山 哲也

世界的に増加傾向にある認知症患者は、日本では 2013 年に 462 万人存在し 2025 年には 700 万人に達するという報告もあり、もはや身近な病気 “Common disease” となっています。国は 2013 年度から 2017 年度までの取り組みとして認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）を提示し、さらに「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」ことを基本的概念とした新オレンジプラン（認知症施策推進総合戦略）を発表しました。その中で認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供の一つとして、歯科医師の認知症対応力の向上が求められています。本講演では、認知症対応力向上の一助となるような、歯科医師が知っておくべき認知症の基本的概念、認知症患者への基本的対応などについてお話しします。

2. インプラント治療の合併症について 16:10~17:10

演者：専門歯科系(口腔インプラント科) 准教授 伊藤 太一 講師 古谷 義隆

近年、インプラント治療は欠損補綴の一手段として広く支持されていますが、その普及に伴い合併症の数も増加していると言われていています。2012 年に行われた日本歯科医学会の開業医を対象にしたアンケートでは、回答者の 24.5%が自院での重篤なインプラント治療の合併症を経験しており、さらに回答者の 88.4%が他院でのインプラント治療の合併症を診察したことがあると報告されています。

インプラント治療の合併症には

- ①補綴学的合併症（上部構造の破損・脱離・不適合、スクリューの緩み・破折、インプラント体の破折等）
- ②外科的合併症（神経・血管損傷、上顎洞内インプラント迷入等）
- ③生物学的合併症（インプラント周囲炎等）

があります。今回の講演では、インプラント治療の合併症において、症例を交えた具体的な対応についてお話させていただきます。

— 休憩（10 分間） — 17:10~17:20

3. ARONJ の原因と誘因、リスク、予防と治療 17:20~18:20

演者：口腔外科系(口腔外科) 助教 森川 貴迪

骨吸収抑制薬関連顎骨壊死（ARONJ）は、歯科だけではなく、医師、薬剤師などの多職種との医療連携が必要な疾患であります。骨吸収抑制薬としてビスホスホネート薬だけでなく、使用の増加傾向にある抗 RANKL 抗体モノクローナル抗体に対する対応が求められています。2016 年には、わが国より新たなポジションペーパーが出され、新たな対応の指針を示しております。

本講演では ARONJ の原因と誘因、リスク、予防と治療について、当院での経験症例を供覧しながら、より臨床に即した内容でお話をさせていただきます。